

総称代名詞 one と自由間接話法

—ヴァージニア・ウルフへの文体論的アプローチ—

山口美知代

本稿の目的は、総称代名詞 one の使い方に焦点をあてて、Virginia Woolf の小説の文体を論じることである。

O. E. D. に‘Any one of everybody; any one whatever; including (and in later language often specially meaning) the speaker himself’¹⁾と定義されるこの代名詞 one を多用するのは、一般に Woolf の「上流階級」的言語の例だとみなされている。¹⁾ 本稿では、one が「上流階級」というある社会的側面を特徴づける効果以外に、文体論上ではどのような効果をもつのかを調べる。文体論上の効果のなかでも、とくに自由間接話法の中での one の使い方が Woolf の文体に大きな特徴を与えていることを指摘することが、本稿の目的である。

分析の対象として *Mrs. Dalloway* (1925) をとりあげる。

文体論的分析の基本的枠組みを本稿は、Leech & Short (1981) に負っている。以下その枠組みを説明したあと、本論に移る。

Leech & Short (1981) は思考の描出モードに関して次のような枠組みを提示した。

(1)

Does she still love me? (Free Direct Thought: FDT)

He wondered, “Does she still love me?” (Direct Thought: DT)

Did she still love him? (Free Indirect Thought: FDT)

He wondered if she still loved him. (Indirect Thought: IT)
He wondered about her love for him. (Narrative Report of
a Thought Act: NRTA)

(Leech & Short 1981: 337)

これらはその「間接性・直接性」に従って一直線上に並んでいると考えられる。

(1b)

NRTA IT FIT DT FDT

(Leech & Short 1981: 344)

また発話の描出に関しても、統語的には思考の描出モードと同じ変化をする五種類の同様のモードが示されている。つまり、Free Direct Speech (FDS), Direct Speech (DS), Free Indirect Speech (FIS), Indirect Speech (IS), Narrative Report of a Speech Act (NRSA) である。

Leech & Short (1981) は思考 (thought) と発話 (speech) を区別したが、本稿ではあえてその二つを区別せずに「話法」として両者に言及する。というのも、思考と発話の区別は意味論的には重要であるが、統語論的には両者は同じ変化をするので、同様に扱えるからである。

意味論的に考えると思考は次の二点で発話と異なる。第一に、現実世界では発話などを通して（あるいは手紙など書かれたものという手段を通して）間接的にしか他の人に伝達されない、という点。そして第二に、その伝達の過程で初めて心内にあるものが文章化される、という点である。だから、思考の描出は IT が標準モードであり、発話の描出は DS が標準モードとなるのだ。(Leech & Short 1981: 337, 345) この思考、発話描出の意味論的な区別は、例えば小説の文体を登場人物と語り手の関係から論じる際などに有効である。しかし、本稿では思考と発話の意味論的な相違点よ

りも、両者の統語的な類似点を重視する。つまり（自由）間接話法では思考も（IT, FIT）発話（IS, FIS）も同じように時制の一致や人称代名詞の変化をうけるという点を重視して、思考と発話を一緒に論じる。したがって、DT と DS は共に「直接話法」として、IT と IS は「間接話法」、FDT と FDS が「自由直接話法」、そして本稿の中心となる「自由間接話法」は FIT と FIS の両方を含む。

この分類に従うと統語的に次のような特徴を備えたものが「自由間接話法」である。

(2)

1 人称代名詞

2 動詞の時制

を間接話法に移行し、

3 語順

4 時や場所を表す表現

を直接話法のままとどめる。

「意識の流れ」を描いた二十世紀初めの代表的な小説家の一人である Virginia Woolf (1882-1941) の文体は多様な話法の巧みな使用が特徴的である。とりわけ自由間接話法に関しては、Woolf の小説はその可能性を最大限に追究している。たとえばそれは、自由間接話法確立期の小説家 Jane Austen (1775-1817) の自由間接話法と Woolf の自由間接話法と比べてみると明らかである。²⁾

統語論的に文の構造という点からみると Woolf の自由間接話法は Austen の自由間接話法と比べて question inversion や right dislocation、topicalization などの多様な構文を、より頻繁に使っていることが観察される。³⁾

本稿の主題である総称代名詞 one の自由間接話法中での自在な使用も

Austen には見られないものであり、Woolf の自由間接話法の特徴のひとつとしてあげられる。以下、その one の使用の特徴、そしてそれが文体論的に持つ効果を論じる。

Mrs. Dalloway のテキストでは総称代名詞 one の使用が極めて多い。主語として one が用いられるのは111例ある。

主語 one のとる述語動詞を調べると、111例のなかで、「時制の一致の法則」(tense-shift rule) を受けた結果として過去時制、あるいは過去完了時制をとっているものが61例ある。つまり、one の半数以上は、間接話法か自由間接話法のなかで使われていることになる。

それは、例えば次のような例である。(下線引用者)

(3)

I can't keep up with them, Peter Walsh thought, as they marched up Whitehall, and sure enough, on they marched, past him, past every one, in their steady way, as if one will worked legs and arms uniformly, and life, with its varieties, its irreticences, had been laid under a pavement of monuments and wreaths and drugged into a stiff yet staring corpse by discipline. One had to respect it; one might laugh; but one had to respect it, he thought. (57-8)

(4)

After India of course one fell in love with every woman one met. (79)

(5)

She came into a room; she stood, as he had often seen her, in a doorway with lots of people round her. But it was Clarissa one remembered. (85)

(6)

Didn't that give her a very odd idea of English husbands?
Didn't one owe perhaps a duty to one's wife? Wouldn't it be
better to do something instead of lying in bed? (102)

(3) は前文の直接話法に続いて、one が自由間接話法中に現れる例である。直接話法で表わせば、'“...one has to respect it; one may laugh; but one has to respect it,” he thought' となるところであるが、has to, may が引用動詞 thought に応じて時制の一致の法則を受けている。(4) (5) もそれぞれ“...one falls in love with every woman one meets” “But it is Clarissa one respects”が自由間接話法の中で時制の一致を受けたと考えられる例である。また (6) は、question inversion の語順が残っている、自由間接話法の例である。

これらの例にある「自由間接話法中の one」は Austen の自由間接話法にはない現象である。たとえば、Austen の小説の中でも自由間接話法がとりわけ頻繁に現われる *Emma* (1816) を見ると、Woolf との差異が明らかになる。

Emma では総称代名詞 one が主語として使われる例は、41例あるが、それはすべて直接話法中に現われ、したがって動詞に時制の一致の法則の適用を受けない。例えば次のような例である。

(7)

'Very true,' said Harriet. 'Poor creatures! one can think of
nothing else.' (111)

Woolf において one が自由間接話法中で頻繁に使われ、Austen では直接話法のなかでしか使われなかったことは、Woolf の one と Austen の

one の性質の違いを反映していると考えられる。ここで、総称代名詞 one の性質についての一般の議論を紹介してから、それをこの二人の小説家のテキストに応用しよう。

総称代名詞 one を ‘personal and indefinite reference’ として、他の一、二、三人称代名詞のシステムのなかに組み入れようという目的で、Wales (1981) は現代英語における one の使用法を調査した。University College, London の the Survey of English Usage をコーパスとし、その中から選んだ one の用例を、one を他の人称代名詞で言い換えるとしたら何がもっとも近いかを多数の native speaker に尋ねて得た結果をもとに、Wales は総称代名詞 one の用例が次の三種類に分類できることを提唱する。

(8)

one 1 = ‘indefinite’ one: includes ‘impersonal’ as well as true ‘generic’ uses: common in educated speech and writing;

one 2 = ‘generic/egocentric’ one: includes speaker; common in educated speech and writing;

one 3 = ‘advanced egocentric’ one: a direct equivalent of I; prevalent among ‘upper class’ speakers.

(Wales 1981: 95)

総称代名詞 one は、その指示の「不特定性」と「特定性」に応じて、つまり「総称的指示」と、それとは逆方向の「話者への一人称的言及」の度合いに応じて、one 1、one 2、one 3 の三種に分けられるというものだ。また、それぞれの one が典型的にとる modality と tense は下のようにとめられている。

(9)

one 1: generic, hypothetical, gnomic; present

one 2: representative generic, reflective gnomic, habitual,

reiterative; preset, past

one 3: cognitive, factive; present, past, future.

(112)

One 1 の generic と gnomic に対して、one 2 の representative と generic reflective gnomic は話者の個人的経験に基づいていることが文脈などからあきらかな場合をさす。One 3、つまり一人称代名詞と同じ意味で使われる one では、認知に関する動詞、事実を述べる動詞が使われることが特徴的である。

総称代名詞 one に関するこの分類を Austen の *Emma* と Woolf の *Mrs. Dalloway* に出てきた one にあてはめてみると、一人称的に使われる one 3 が *Emma* では41例のうち10例(24%)なのに対して、*Mrs. Dalloway* では111例のうち63例(57%)とはるかに高い比率を占めていることがわかる。とくに自由間接話法、間接話法では61例のうち39例(64%)であり、(自由)直接話法のなかよりもその割合が高い。Woolf のほうが one を一人称的に用いる傾向が強く、また特に、間接話法、自由間接話法においてそうなのである。

自由間接話法中の、one 3 の例をさらにいくつかあげておこう。

(10)

A terrible confession it was (he put his hat on again), but now, at the age of fifty-three, one scarcely needed people any more (88)

(11)

A whole lifetime was too short to bring out, now that one had acquired the power, the full flavour ; (88)

(12)

When one was young, said Peter, one was too much excited

to know people. Now that one was old, fifty-two to be precise (Sally was fifty-five, in body, she said, but her heart was like a girl's of twenty); now that one was mature then, said Peter, one could watch, one could understand, and one did not lose the power of feeling, he said. (212)

(13)

Sinking her voice, drawing Mrs. Dalloway into the shelter of a common femininity, a common pride in illustrious qualities of husbands and their sad tendency to overwork Lady Bradshaw (poor goose—one didn't dislike her) murmured how... (201)

一人称的に用いられる one 3 の割合が高くなる傾向と、one の用いられる範囲が直接話法中だけでなく、間接話法、自由間接話法にまで広がる傾向が、Austen と Woolf のテキストを比べたところでは一致している。この二つの傾向の相関関係について、ひとつの仮説を提示したい。それは、Woolf では総称代名詞 one の総称性が低くなり、一人称的になったことが、one が間接話法、自由間接話法に自由に現われるようになったひとつの要因だ、というものである。

三種類それぞれの one に特徴的な tense として (9) であげたように、純粹に総称的な one 1 では、現在時制が基本である。Lakoff (1970) が指摘するように、意味論的には総称的過去、総称的未來も可能であるが、総称文に無標の時制は総称的現在時制である。この総称的現在を間接話法、自由間接話法のなかで用いると、時制の一致の法則の適用に関して問題が生じる。時制を過去に一致させればその総称性の効果が弱まり、一致させなければまわりの過去時制の文との調和が乱れる。この、時制の一致と総称的現在の問題点が、Austen が one 1 を直接話法のみで使うのにとどまらせた一因である、という仮説である。それに対して Woolf は one 3 の方向

へ進んでいるので、その総称的効果に重きをおかずに、間接話法、自由間接話法中でも自由に、時制の一致の結果の過去、過去完了時制と one を用いたと考えるものである。

最後に、one 3 を間接、自由間接話法中で用いることの文体論上の効果を Leech & Short (1981) の枠組への位置づけ、という点から考察する。

Woolf はもちろん、間接、自由間接話法の中での one の使用を意図的に実験していたわけではない。しかし結果として彼女の小説は「間接、自由間接話法中の one」という興味深い現象を作り出した。これは文体論的観点からみた場合以下のような効果を持つ。

自由間接話法は (2) でみたように、人称代名詞、動詞の時制を間接話法に移行し、語順及び時や場所を表す表現を直接話法のままとどめる。

ところで、one 3 は意味論的には一人称的であっても統語論的には三人称代名詞であるので、(自由)直接話法、(自由)間接話法に関わらず常に one であり、one を (自由)間接話法中で用いる場合と (自由)直接話法で用いる場合との差は動詞の時制だけになる。このことは、直接話法に近い (自由)間接話法、という文体論上の効果をもつ。

例の (13) で考えてみよう。

(13) poor goose—one didn't dislike her. (201)

これは自由直接話法ならば

(13b) poor goose—one doesn't dislike her.

(13) と (13b) の差は didn't—doesn't の動詞の時制だけである。一方、これが one を用いず通常の一人称代名詞 I を用いるなら、自由間接話法、自由直接話法がそれぞれ

(13c) poor goose—she didn't dislike her.

(13d) poor goose—I don't dislike her.

となって両者の違いは didn't—don't という動詞の時制だけではなくて she—I の人称代名詞にもある。

One を使うと直接モードと間接モードの差が、動詞の時制の差だけになるので、より「間接性の少ない」間接モードが得られることになる。Leech & Short (1981) の枠組みを使うならば、この「One 3 を主語に用いた自由間接話法」は下のように位置づけられるだろう。

(14)

<u>NRTA</u>	<u>IT</u>	<u>FIT</u>	<u>DT</u>	<u>FDT</u>
<u>NRSA</u>	<u>IS</u>	<u>FIS</u>	<u>DS</u>	<u>FDS</u>

↑

One 3 を主語に用いた自由間接話法

One 3 には社会階級によって、また時代によって使用域が限定されている、という制約がつくが、その留保のなかで考えると、この三人称動詞変化をとりつつ一人称的自己言及機能をもつ代名詞は、自由間接話法の多様性を増やす工夫のひとつであるといえるだろう。

本稿では Virginia Woolf の *Mrs. Dalloway* 中の自由間接話法が one を多く含むことを指摘し、それが一人称代名詞として使われることから文体論上の効果をもつことを論じた。この現象は例えば Jane Austen の自由間接話法と比べると、Woolf に特徴的であることがわかる。他の作家の自由間接話法との比較が今後の課題といえる。

註

- 1) Phillips (1984: 76) はヴィクトリア朝の言語と社会階級を論じるなかで「不定代名詞 one はフランス語の on がそうであったようには、英語のなかで自然なものにはなっていかなかった。うわべはへり下ったこの代名詞は、逆説的に、ある種の自信過剰と、そして傲慢さえ暗示する」と言い、上流階級の好む語だとしている。
- 2) Pascal (1977: 59) によると「それ以前には基盤とするような伝統がなかったのに Austen の小説中には驚くほど豊かな自由間接話法の使用が見られる」
- 3) Banfield (1982) はこれらの non-embedded structure を許すところが自由間接話法の特徴だというのが、実際、これらの構文が頻出するのは Austen よりむしろもう少しあとの時代の Woolf らの自由間接話法である。

<使用テキスト>

Austen, Jane. (1985). *Emma*. London: Penguin.

Woolf, Virginia. (1980). *Mrs. Dalloway*. London: Hogarth Press.

<参考文献>

Banfield, A. (1982). *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*. Boston: Routledge and Kegan Paul.

Comrie, B. (1985). *Tense*. Cambridge: CUP.

Fowler, R. (1977). "The referential code and narrative authority." *Language and Style* 10. 129-161.

Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.

- Lakoff, R. (1970). "Tense and its relation to participants." *Language* 46. 838-849.
- Leech, G. & Short, M. H. (1981). *Style in Fiction*. London : Longman.
- Pascal, R. (1977). *The Dual Voice*. Manchester: Manchester UP.
- Phillips, K. C. (1984). *Language and Class in Victorian England*. Oxford: Basil Blackwell.
- Wales, K. M. (1980). "'Personal' and 'indefinite' reference: the users of the pronoun pone in present day English." *Nottingham Linguistic Circular* 9. 93-112.